埼玉大学紀要　教育学部，57(1)：225-227(2008)

創造をどこまで科学すべきか？－昨今の脳神経科学への疑念

小澤　基弘*

* 埼玉大学教育学部美術教育講座

昨今、脳神経科学が飛躍的に進歩して、芸術創造と脳の働きとの相関が明らかになってきている。絵を専門とする私にとって、見ることと描くことの関係、それが脳の作用とどのように結びついているかを知ることは極めて興味深い。私たちが見てる光景、例えば事物の色や形、動き等々は、分断されることなく全体として一挙に見えていると私たちは思い込んでいるが、実はそれぞれは脳の別々の部位で認識されるらしい。脳のある部位を損傷すると動きだけが見えなくなったり、また別の部位を損傷すると視野の半分が欠損したり、母親の顔が見えてはいるが母親だと認識できなくなったりすることもあるというのだ。あるいは数字を聞くと色が見えるという人もいるというが、それは数字を認識する脳の部位と色彩を認識する部位が近くて、神経がクロス混線しているからだという。芸術家が想像力豊かなのは脳内のそうしたクロス混線が多岐に渡っているために、匂いを嗅いだだけで映像的イメージが起こるとか、音を聞いて色彩が想起されるということが容易に生ずるからだというのである。この種の本のなかで私はサヴァン症候群の5歳の少女が描いた馬の絵を見たが、それはデッサンの修練を経た画家のものと同質の正確さと緻密さを備えた見事なものだった。脳の他の箇所が機能しないために、機能する部位だけに情報が集中し活性化した結果らしく、年を経て症状が回復するにつれて彼女の描画力は徐々に落ちていったという。最近の研究ではピカソも同様の脳疾患を抱えていたと聞く。彼も少年期からすさまじくデッサンが上手かったため、画家であった彼の父親は自分の無能さに絶望して絵筆を折ったという話は有名である。

確かに脳神経科学の進歩はこれまで知りえない人間の創造性と脳との関係を明らかにしてくれる、が、それとともに創造の神秘性は確実に剥奪されていくのではないか。「この薬を飲めばすばらしいデッサンが簡単に描けます！」とか「この薬で色彩感覚を研ぎ澄まそう！」などというキャッチコピーのついた芸術創造促進錠剤などが近い将来現れる可能性もあるかと思うと、恐ろしさを通り越して虚脱感すら覚える。かつてのLSDなどはその類かもしれない。また当然美術教育の意味への懐疑の念も起こるだろう。創造行為が脳内環境の特殊性（異常性）故に生ずるという視点に立ってしまうと、その創造行為を奨励する美術教育は、正常な脳機能の異型化に一役買うことになるではないのかという疑念が起こる。創造行為とはあくまで神秘的なものであり、一般の人間には到底真似できない崇高さとして天才性なるものを褒め称える素朴さが、これまで芸術を芸術たらしめてきたと思う。それが喪失したら、果たして芸術や芸術創造はどう受け止められるのか。確かに芸術は狂気と紙一重であるという認識は古くからあった。しかしその場合の狂気は神秘性と同義でもあった。狂気という捉え方と脳の生理的異常という捉え方は似て非なるものだ。前者は天才性に、後者は奇形性に帰され得るからである。そこには畏敬の念というよりも好奇の念が先行するだろう。それを思うと私は昨今の脳神経科学の創造への踏み込みの成果がとても恐ろしい。

（2007年9月28日提出）
（2007年10月19日受理）

「現象としての身体：吊られた人」 194×130 cm　パネルに綿布、石膏地、アクリル　2006年